

# ともに 歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔を。  
暗闇に立ちすくんだ時、  
この記録が足元を照らす光となるように。  
そしてまた明日の朝を迎えられるように。  
朝日新聞社員がつづる。

9月号、11月号、2016  
年1月号では、「子どもたち」  
特別編をお届けします。  
その間の「明日の風」は休  
載します。

## 子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た  
子どもたちの記憶を刻みます

### 美谷島健ちゃん

「1976年6月18日生まれ」と一緒に①

「だいじょうぶ、ぜったい見ていてくれるから」

524人が乗った日

本航空123便(ボー

イング747型機)が

七十七銀行女川支店の行員だった。

職場の指示で2階建て支店の屋上へ

避難した。

屋上の行員ら13人全員が流された。

支店から約100メートル先が女川

港の岸壁だった。津波が岸壁に達した

のは地震発生から約35分後。支店から

徒歩約3分先に町の指定避難場所・

堀切山があり、その山へ400人余り

が避難して助かった。

「なぜ山へ避難しなかったのか」

孝行さんは問うた。

銀行側は、マニュアルでは屋上も避

難場所にしており、高さ約10メートル

の屋上を越す津波は予見できなかった、

との説明を繰り返した。

孝行さんら3家族は、銀行に損害賠

償を求める訴訟に踏み切った。「なぜ」

の究明を法廷に託したが、一番でも控

訴審でも訴えは退けられた。今は最高

裁へ上告中だ。

孝行さんは、日航機事故の遺族に学

びたいと願った。今夏、慰霊登山を決

意して、早朝の通勤電車の中、1冊の

本を開いた。

書き出しは「ヘチマの観察日記」。

「8月11日 ぼうを立てても、どん

どんのびるのでこまる。ほん葉は20ま

い。ふた葉はすでにかれてい。一ぱ

ん下のほん葉はきいろい色をしている。

ふしぎだ」

その文字はすぐに涙でぼやけた。手

にしたのは、美谷島邦子さんが著した

『御巢鷹山と生きる』(新潮社)。日記

を書いたのは次男の健ちゃんだ。翌日

の1985年8月12日、123便で親

類が待つ大阪へ。初めての一人旅だった。

美谷島さんに会いたい。読後、その

気持ち伝え、一緒に登ることになっ

た。

### 今まだ涙が

### 音を立って落ちる時

今年の8月8日。登山口から山頂ま  
で約800メートルの道を美谷島さん  
が先導する。孝行さんは妻の弘美さん  
を伴った。

事故後、日航機の遺族は「8・12連  
絡会」をつくった。事務局長が美谷島  
さんだ。

道中、会員の遺族に会う。「苦しい  
時に来てくださって」と会員が夫妻を  
いたわると、美谷島さんも「歩きなが  
らも涙がポトポトと音を立って落ちる  
ような時なのになえ」。

美谷島さんは道々、事故後を語る。  
事故原因は過去の修理ミスとなったが、  
「修理ミスがなぜ起きたか、いまだにわ  
かっていない。なぜミスを防げなかつ  
たのか、そのミスをなぜ事故前に誰も  
発見できなかったかを知りたい」とあい  
づちを打つ弘美さんに、美谷島さんは  
口調を強めて「そこなの。背景を調べ  
なかつたら何も変わらない」。

あちこちに墓標がある。遺体発見場  
所でもある。年齢も記してある。美谷  
島さんは「20代の子をなくされたこへ

墜落し、520人が犠牲になった事故  
から30年が過ぎた。犠牲者の1人、小  
学3年生の美谷島健ちゃんを訪ねて、  
今年8月、日航機の最後の地・群馬県  
上野村の御巢鷹山へ、東日本大震災で  
子どもをなくした親たちがやってきた。  
今回は女川町で長男をなくした両親の  
慰霊登山を記す。

長男が女川湾で見つかったのは、半  
年後の9月26日。その7日前の19日は、  
長男の26歳の誕生日だった。

それ以来、毎夜のように、父の田村  
孝行さんはうなされる。「逃げるー」

とほえるように叫びつづける夢を見る。

満開の桜が瞬く間に散っていく夢も。

長男の名は健太さん。

両親の無念さはすごかった」と思い起こす。弘美さんが長男の健太さんに重ねて「輝く寸前だったんです」と応えようと、「そうですね、日航機の遺族も同じです」。

孝行さんが「休日はどうしても女川に足が向くんです」と切り出せば、「わかります、わかります。行けば会えるもんね」。こぼれる涙をひるうように言葉返す。

切り立った崖にたどりついた。次男の健ちゃんの墓標が立つ。ドラえもんのおもちやが取り囲む。こいのほりがある。おもちやの電車も。野球のグローブも。

背中の中のナップザックを下ろし、おもちやを入れ替える美谷島さんに、孝行さんが野球ボールを差し出した。

「息子のです」。球面に孝行さんの字で「一意専心 田村健太」とある。健太さんは高校球児だった。捕手を務め、3年生の夏の宮城県大会でベスト8入りを果たした。「健ちゃんも野球が大好き。健太と野球の話で盛り上がりたければ」と弘美さん。

美谷島さんは墓標前の岩の間にそつとつけて、小さな声で「健ちゃん、よかったね、置かせてもらおうね」と話しかけ、ボールに何度も「ありがとうね」とささやいた。

眼前にどこまでも山並みがつづく。弘美さんは声を震わせた。「こんな所に投げ捨てられたのかと思うと、悔

しいよね。孝行さんも声を詰まらせて「最後どう思ったのか。息子たちもすごい恐怖と絶望感があったと思うんです」。会いたい一心で健太さんを捜し歩いた4年前の夏がよみがえってきた。

美谷島さんは穏やかに引き取る。「せつたい助けてあげられたと親は思いますね」

「もう自責の念ばかりで……」と声を絞り出す孝行さんに、「私もね、日航よりもまず、どうして自分が助けてあげられなかったのかという気持ちがありますね。それが苦しいですよ」。

「何かやってあげられることがなかったのかなあって……」と涙ぐむ弘美さんにも微笑んで、「だいじょうぶ。これから少しずつ。まだ日が浅いのに、えらいと思いますよ」。

弘美さんは健太さんの写真を取り出した。「健太、見て見て、この山」。傍らの美谷島さんはその写真を自分の両手におさめ、

「一緒に健ちゃんの所に来てくれたんだ」。胸元に抱き

寄せるようにして言った。

「だいじょうぶ。せつたい見ていくれるから」

写真にも微笑みかけて「自分の意思を持つている、すごくしつかりした感じね」。

弘美さんは「我慢強く、真面目でしたね。それが最後あだになっちゃって勝手に山へ逃げてくれればよかったなって」。

「つらいね。話すたびに涙が出てくるかもしれないけど、それは30年たっても一緒です」

「忘れる時間ってないですね」と漏らす孝行さんにも、笑顔返して、「私は最近『一緒にいるよ』と言えるようになったので、いろんなことをやっている、そういう瞬間があるかもしれない。だいじょうぶ」。

ナップザックからシャボン玉の道具を取り出した。

「健ちゃんここ、飛ばそうか」

虹色の玉は木立の中へ。サワサワサワサワとやわらかな葉ずれの音が返ってくる。

「健太君にも飛ばしてあげて」と弘美さんにも道具を渡し、一緒に飛ばす。虹の玉を見送り一言、「見ているね」。「見ている、見ている」と弘美さん。

**あまり無理をしないこと**

「美谷島さんにとって、30年は長かったですか、短かったですか」

弘美さんの問いかけに、「1日1日積み重ねてきただけで。8月12日から1年を数えて『また1年間がんばろう』と遺族同士で言い合って。振り返ったら30年」。

9歳だった健ちゃん。9年という約束で自分たち家族の元へ来てくれたんだ。そう思うようにした。さもなくば、とても耐えられなかった。でも、なお思いつづける。健ちゃんのためにできることは何か。

「失われた命を生かそう」というのが私たちの目標。それが520人のためにやれる最大のこと。これを教訓に、次の事故では、1人でも生かしてもらわないと、何のために亡くなったのか、わからない」

「ただね」と言い添えた。「あまり無理をしないこと。がんばりすぎてポロポロになっちゃうと、健太君が悲しむそんなつもりはなかったよって言われちゃう」

ふたたび葉ずれが風の訪れを告げる。足元で1羽のチョウが舞っていた。健ちゃんの前で1時間近く語り合う。

帰り際。孝行さんはほつりと言った。「息子の夢も見ないんです」

「私もあんまり見ませんね」と美谷島さんは明るく返した。

「そのうち、突然、夢に出てくるかもしれない。でも、それはそれでだめですよ、悲しくて。出てこないほうが、一緒にいると思えていいかもしれない」



# 雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの  
雄勝病院の話から始めよう。

[第10回]

## 床の水を手早く拭く今野京子さん

県道をはさんで海と向き合う病院の敷地には、本館と新館がL字型に立っていた。両館とも最上階の3階が病棟で、あの日、40床のベッドは満床だった。

病院にとどまった職員28人のうち24人と、入院患者40人全員が犠牲になった。

職員4人が救助された。今回は、その1人、当時31歳だった看護助手の証言をたどる。彼女をここではCさんと呼ぶ。

病院で働き始めて9カ月目だった。あの日には中番。午前8時から午後2時45分までの勤務だ。

昼過ぎ、遅番の看護助手2人、今野京子さん(当時50)と永沼顕さん(当時23)が加わった。

今野さんは勤続11年目のベテラン。町の東、桑浜から通勤していた。永沼さんは唯一の男性助手。県立飯野川高校の生活福祉科で学び、町の西北、船越から通っていた。

昼休憩後、仕事を再開するCさんに、今野さんは言った。

「ひとりで無理なら呼んでね。手伝ってあげるよ」

患者の手足を洗うため、各自洗面器に湯をはり、それを手に病室へ。湯には茶葉を詰めたティーバッグが浸してある。

せっけんは、洗い残すと、ひふを傷めることもある。茶葉はその心配がない。殺菌効果も期待できる。洗った後、患者の握ったままの手には、新しいティーバッグを握らせた。

Cさんは新館の323号室にいた。4人部屋だ。ベッドから洗面器をおろした、その時、激震が襲った。床の洗面器も大揺れし、湯が飛び散った。

別室から「きゃーっ」と女性の悲鳴が聞こえた。

Cさんはベッドにしがみついた。女性患者(当時87)に声をかけた。

## 永沼顕さんへ看護師は「あきら君」

永沼さんは、倒れた冷蔵庫やテレビを直していた。178センチの長身の彼にはナースステーションからも声がかかる。

た。

「いま地震が起きていますよ」

「地震だな」

……と声が返ってきた。

本震後、周りを見る

と、床は水浸しだった。

今野さんがやってきた。

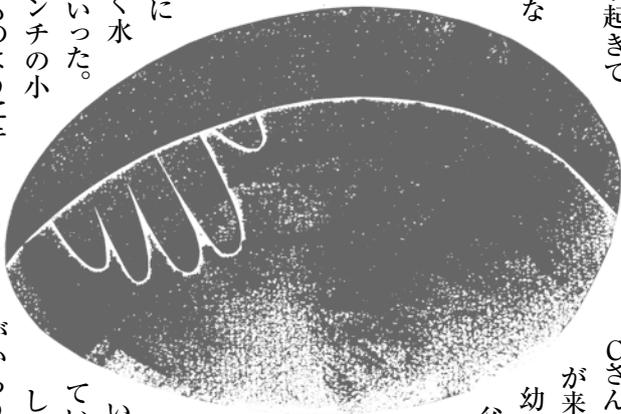
新聞紙を床に広げ、手早く水を拭き取っていった。

身長148センチの小さな体をいつものようにキビキビと動かす。

Cさんは廊下奥の看護助手の部屋へ戻った。「うちが心配で、携帯かけてもいいですか。今野さんに断り、町内の自宅へ電話をかけたが、応答がない。

「あきら君、こっち直してー」「はいはい」。いつもの穏やかな声で応じていた。

今野さんは、割れたコップを



片付けていた。Cさんはこぼした。「帰りたいな。うち、どうなったんだらう」

窓から玄関前の駐車場を見下ろすと、末永三和子看護部長(当時59)らが話し合っていた。

Cさんは思った。(津波が来るかもしれない)。

幼い頃より漁師の父から「雄勝は湾になつてつか

ら、危ねえんだ。津波が

奥まで行くと、高くなつたら

津波が来たら

思ったほうがい

いと」と聞かされていた。

しかし、(患者さん

がいるうちは逃げられない)と覚悟し、(避難指示が出るかな)と思いつつ、片付けていた。

海が見える窓に職員たちが集まっていた。Cさんも行った。

防潮堤から県道へ海水があふれるように流れ込んでくる。

(あつ、津波が来たんだ)。即座に理解した。すぐにおさまるか

と目を凝らす。流水の勢いは止まらない。駐車場が見える窓へ急いだ。

自分の車が流されていく。車同士が音を立ててぶつかり合いながら、病院の裏山へ。病院の両脇から流れ込む水は、裏山でせき止められ、山際に車がたまっていく。

並んで見ていた看護師の高橋初枝さん(当時51)が「保険、入ってたつけ」とつぶやいた。

「あーあ」と一緒にため息をつき、外を見つめた。皆はまだ落ち着いていた。

Cさんは、今野さんに「帰らなくてよかったね」と言われ、「ぞうですね」とうなずいた。

1階が水没した。2階も。水はゆっくり3階へ迫る。

(あ、本当にやばいかな)。そう思った時、男性職員の叫び声が出た。

「屋上へあがれー」

Cさんは見渡した。(患者さんをどうするんだらう)。職員

たちは次々に屋上へ駆け上がった。いく。自分も屋上へ走った。

まだ足元はぬれていなかった。屋上で小雨に打たれた。

「本館の人たちも上がってきたね」と女性職員の声が出た。

Cさんは本館屋上に白衣の人影を見た。(患者さんを連れてきたんだ)。患者をくるんで運ぶ本館屋上の光景が視界に入った。同時に思った。(置き去へ

==== 女川町議会 福島を視察⑩ =====

## 「帰町準備室」の札 住民いない中のむなしさ

女川町議会は2014年夏、東京電力・福島第一原発事故の被災地を視察した。最初に訪ねたのは浪江町。原発は隣の大熊町と双葉町に立つ。女川町議12人を乗せたバスは、JR常磐線の浪江駅近くの町役場に向かった。

7月3日の木曜日だった。12人は4階建ての役場へ入る。1階中央、住民が行き交えるホールは、2階のガラス天井から降り注ぐ日の光に包まれていた。だが、住民の姿はない。休日のような光景だ。

カウンターに掲げられた部署の名称は「帰町準備室」。職員たち数十人は一斉に起立し、12人を迎えた。

「涙が出てきた」

女川町議の阿部薫氏(65)は振り返る。職員たちの淡々とした表情が忘れられない。衝撃を受けたと語る。

「住民が誰もいない中で、机上で準備をしなくちゃいけない。非常に長い先の帰町にむけて。むなしさを感じたな」

今も全町避難中の浪江町は14年7月時点で、17年3月に一部地域の避難指示解除を見込んでいた。現実には宅地造成は始まっておらず、放射能汚染を除く作業が続いていた。阿部氏ら町議12人はバスの車窓から浪江駅周辺の中心街を目にする。住宅も商店も、事故後、手入れできずに雑木と雑草が覆う。現在、避難指示解除の時期は16年3月までに見直す予定だ。

事故の現実を踏まえ、今、阿部氏が東北電力に望むのは、女川原発の「最大なる安全運転」だ。

東北電力は女川原発の2号機から再稼働をめざす。しかし、14年9月、原子力規制委員会による保安検査で2号機の設備の点検記録に不備が見つかった。保安規定違反の判定を受け、再確認した結果、記録の不備は計4188件に及んだ。さらに、1号機と3号機でも、同様の記録の不備を計474件確認した。

阿部氏は「4件、5件というなら、まだわかる。4千件なんて」と憤る。

「従業員のレベルはどうなの。こんなに間違いを起こして優秀だって言えるのか」。広報資料を手に定期的に自宅へ報告に来る東北電力の社員にも怒りをぶつけた。『「こうする』『ああする』という話は要らない。『無事故無違反』。求めるのはこれだけだ」

りにしてしまった」

もう一度、自宅へ電話をかけたが、つながらない。新館屋上からは本館3階の病室が見えた。水没していく。

(置き去りにしてしまつたな……)。また思った。ゴーツと水の流れ込む音が、今も耳元に残る。しぶきをあげて病室へ流れ込む光景も脳裏に残る。屋上にも四方八方から流れ込んできた。

皆、屋上のへりの上に立った。看護師たち、Cさん、永沼さんと一列になる。

永沼さんのそばに、屋上への出入り口を囲つた塔屋がある。「あきら君、そっちのぼれないの?」。看護師らが尋ねる。永沼さんは両手を伸ばすが、「のぼれません」。ひざまで水が達する。

家屋の一部が流れてきた。

そこをめざし、皆が泳ぎ始めた。数メートル先だ。泳ぎが苦手なCさんも、犬かきのように手足を必死に動かした。トタン屋根だ。上ろうにも、滑る。また上ろうとした時、下から鈴木

## 沖から高橋初枝さん「がんばって」

引き波が始まり、屋根が傾いた。速い。ふり落とされそう。四つん這いでつかまつた。Cさんが「どこまで流されるんですか……」と漏らすと、隣の高橋さんは「わかんない……」。副院長は無言だった。

海岸沿いに流されていく。沖を向き、必死にしがみつくと、雪が降りしきつていた。職員たちは散り散りになつていく。

次に押し波。壁が迫ってくる

孝壽副院長(当時58)が押し上げてくれた。

「詰める、詰める、端へ行け」副院長がCさんを急かす。看護師の高橋さんも続いていた。

ふりむくと、漂流物に乗った職員たちが見えた。

「がんばって」と思った直後、海へ落ちた。別の漂流物に乗った。

Cさんは雄勝湾内へ。副院長と高橋さんが乗った屋根は沖へ遠のいていく。副院長たちは屋根の上に座り、副院長は高橋さんを暖めるように背後から抱きしめていた。ひとりきりになったCさんは、心細くなり、「誰かいませんか」と声を上げた。

「がんばって」

Cさんへ呼びかける高橋さんの声だ。吹雪の中、沖に小さく2人の姿が見えた。

漂う板を拾い上げ、雪よけにした。湾内を回る。ゴーツという地鳴りが何度も聞こえた。

病院から海岸伝いに約6キロ西、水浜が見えた。

漂ってくる物にすがって浜辺へ向かう。左手に家が見える。浅瀬で足がついた。

垂直にそそり立つ崖にひるんだが、再び津波に襲われる恐怖のほうに勝った。草木につかまり、高さ5メートルはありそうな崖をよじ登った。

日の明かりが残る中、登り切り、左へ向かう。道路に行き当たらず、積雪の中、足が震えた。枯れ葉を掘つ

た。下草は乾いていた。うずくまって暖を取る。服は泥まみれに。また歩き出す。家が、道路が、人が見えた――。

Cさんは今も忘れない。病室の掃除、シート交換、食事や入浴の介助、そんな仕事を次々こなすため、廊下を走ったこともある。看護部長の末永さんは明るい声で止めてくれた。

「走っちゃだめなんだよ。患者さんや家族が不安に思うから」

永沼さんも今野京子さんも仕事は丁寧で早い。

あきら君はいつも温厚だった。怒る姿を見たことがない。

京子さんは皆に優しくかった。失敗して落ち込む自分にも「大丈夫だよ。気をつけるように言わなかった私も悪いんだから」。その言葉を忘れられない。